

2023-24年度レギュラーコースカリキュラム報告

—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下IUCと略記）では、①10カ月間にわたるレギュラーコース、②夏期集中コース、③夏期漢文コースの3種類の集中日本語教育が行われている。本稿は①のレギュラーコースについて報告するものであり、②と③については[加藤 \(2024\)](#) と [大竹 \(2024\)](#) を参照されたい。

2018-19年度以来の完全な対面教育体制に復帰した本年度レギュラーコースは、2023年9月4日から2024年6月7日までの40週間、学生53名（うち博士課程11名、修士課程18名、その他24名）を指導した。指導にあたった教員は常勤教員10名、非常勤教員12名であった。

2 レギュラーコースの概要

40週間のレギュラーコースは4学期に分かれており、最終週に開催される卒業発表会によって締めくくられる。今年度の第1学期は9月4日から10月27日までの8週間、第2学期は11月6日から12月22日の7週間、第3学期は1月15日から3月8日までの8週間、第4学期は3月25日から6月7日までの11週間であった。前期（第1学期と第2学期）は主に《日本語》を意識し学ぶことに比重がおかれ、後期（第3学期と第4学期）は各学生の専門や関心領域に近い《内容》を日本語で取り扱うことに比重がおかれる。

毎日の授業は午前と午後に分かれる。前期の午前は文法など言語の形式面・機能面を重視し、午後は内容重視の授業で聴解、読解、発話等の総合的な言語の運用力を高める。後期は午前にも内容重視の科目が追加される。

現在IUCで開講されている授業は以下の通りである。第1学期の午前は「文法・待遇表現Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅰ」。第2学期の午前は「接続表現」「統合日本語Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅱ」。第3学期は午前の「統合日本語Ⅱ」が全学生の共通科目であるが、同じく午前の「選択A」「選択B」、そして午後の「総合運用Ⅲ」は学生の関心に沿った選択科目である。第1学期から第3学期までの金曜午後は「総合運用」の授業は行わず、原則、学生の自習時間とする（「寺子屋」と呼称）。第4学期の午前は「統合日本語Ⅲ」「選択A」「選択B」。午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「文法強化クラス」という3選択肢から1つを選ぶ。第3・第4学期には、随意に履修できるオプション科目、「選択C」「就活指導」も用意される。

2023-2024年度 40週間のレギュラーコース日程

週	10:00-11:50 午前	13:20-15:00 午後 (原則水曜なし)		
1	オリエンテーション・試験・面談	面談・避難訓練など	↑ 第1学期 9/4-10/27 8週間 ↓	
2	文法・待遇表現	総合運用 I 寺子屋 (金曜)		
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9	秋休み1週間 10月28日(土)～11月5日(日)			
10	接続表現 統合日本語 I	総合運用 II 寺子屋 (金曜)	↑ 第2学期 11/6-12/22 7週間 ↓	
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17-19	冬休み3週間 12月23日(土)～1月14日(日)			
20	統合 日本語 II	総合運用 III 選択 C (水曜) 寺子屋/就活指導 (金曜) 個人面談	↑ 第3学期 1/15-3/8 8週間 ↓	
21				選択 A 選択 B
22				
23				
24				
25				
26				
27				
28-29	春休み2週間 3月9日(土)～3月24日(日)			
30	統合 日本語 III	プロジェクトワーク/ グループ学習/文法強化 選択 C (水) 就活指導 (金)	↑ 第4学期 3/25-6/7 11週間 授業は実質 8週間 ↓	
31				選択 A 選択 B
32				
33				
34				
35	GW休み1週間 4月27日(土)～5月6日(月)			
36	統合 日本語 III	GWの前と同様		
37				選択 A B
38				
39				
40	試験5/27月、発表準備 発表6/3-4 面談6/5-6 修了6/7	試験5/27月、発表準備 発表6/3-4 面談6/5-6 修了6/7		

3 ICTの活用状況

3-1 完全対面教育体制への復帰に伴う変化

昨年度までのオンライン体制下で頻繁に使用されていたZoom²は対面体制への完全復帰によって授業で用いることはなくなったが、教職員会議、教員対学生の個人面談、会話パートナーセッション³などでは引き続き活用された。授業でも、内容の録画を目的として使われる場合があった。また、悪天候などの理由でIUCキャンパスへの通勤・通学が困難な場合に緊急的な措置としてZoomでのオンライン授業を行う選択肢を用意していたが、今年度はその選択肢が用いられることはなかった。

一方で、オンライン体制下と同様に、授業用資料や事務的な各種情報の掲示と宿題の提出・採点のためにはGoogle Workspace for Education Fundamentals⁴を、試験のためにはQuilgo⁵を、そして教職員同士の日々のやりとりにはSlack⁶を利用した。詳しくは、昨年度のレギュラーコースカリキュラム報告⁷を参照されたい。

教材の配布は、オンライン体制下のようにデジタル形式で統一するわけにはいかなかった。例えば後述のテキスト『新 待遇表現』は約半数の学生が紙での配布を希望した。年度末に実施した学生アンケートでは紙の教材と電子教材のどちらが使いやすいかを尋ねたが、電子教材と回答した者が30.6%、紙が34.7%、どちらでもいいとした者が34.7%と、電子教材よりも紙を好む者が若干多い結果となった。IUCで教材の電子化をどのような形でどの程度まで推し進めていくかは今後の検討課題であるが、検討のためには学生の好みあるいは抵抗感を今後も注視していく必要があるだろう。

3-2 RepeaTalkの導入

自習用教材としてRepeaTalk（リピートーク）⁸を導入し、文法・待遇表現、統合日本語、漢字学習プログラムの聞き取りや音読の練習に活用した。

3-3 生成AI等活用についての指針

今年度は生成AI等の利用について以下の指針を学生に示した。「生成AI等のICTを学生自身の日本語運用能力を高める補助として使うこと、そしてより有効な使い方を試行錯誤することは歓迎する。ただし、AIによって生成された文を自分が作ったものと偽って提出することは、剽窃行為とみなし、厳禁する。宿題などでAIを使った場合、何をどこで何のために使ったか、申告せよ。」

4 第1学期の教育内容

月～金曜の午前の授業は「文法・待遇表現」を7週間実施した。午後（6週間）は月・火・

木曜に「総合運用 I」の授業を、金曜に「寺子屋」を実施した。

4-1 午前の授業内容

4-1-1 文法・待遇表現

第1学期は、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向上させる目的で文法の授業を行った。そして、日本語話者と円滑な人間関係を構築できるよう待遇表現を指導した。文法については、IUC作成 *Japanese Grammar*、IUC作成 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese*、『レベルアップ日本語文法 中級』⁹のいずれかを、各クラスの日本語習熟度に応じて使用した。待遇表現については主教材としてIUC作成『新 待遇表現』を用いた。クラスによっては待遇表現の学習準備としてIUC作成「プレ待遇表現（動画スキット全4回）」を導入した。

指導には、32日間68コマをあてた。文法と待遇表現の各ユニットをどのようなスケジュールで扱ったかはクラスによって異なるが¹⁰、概して文法には22日間44コマ程度、待遇表現には10日間20コマ程度の時間を割いた。

4-2 午後の内容

4-2-1 総合運用 I

月・火・木曜の「総合運用 I」は主として読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、総合的な日本語運用力の向上を目指した。第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」という単元から開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを活用する機会を提供した。単元の最後には、教員やIUC卒業生が教職員をインタビューしたビデオを参考に学生自身がインタビュー活動を行い、その内容について授業で発表を行った。続いて新聞やニュースを教材とする社会性をおびた単元に進み、日本の時事を報告・論述するための単語・表現を学び運用する機会を提供した。16日間32コマをあてた。

4-2-2 寺子屋

金曜は「総合運用 I」の授業を行わず、「寺子屋」と称して学生が自由に自分の望む勉強ができる時間を設け、自律的な学習を促した。学生はこの時間、日本語能力の向上に資することであれば何をしていてもよく、活動の場所も自由とされた。ただし、IUCにいれば教室に待機している数名の講師のところに質問に行ったり、雑談をしに行ったりすることができた。

「寺子屋」は、常勤講師による個別指導やフィードバック、後述する「KIC統一試験」（9-2を参照）や外部講師を招いた講演会、あるいは漢字の形やバランスに気をつけながら

書き方を指導する「漢字練習会」など、通常授業の枠に収まらない様々な活動を実施する時間としても機能した。

「寺子屋」には5日間、計10コマ分の時間をあてた。

5 第2学期の教育内容

月～金曜の午前の授業は「接続表現」を3週間、その後「統合日本語Ⅰ」を4週間実施した。午後は月・火・木曜に「総合運用Ⅱ」の授業を7週間行った。第1学期に続いて、第2学期も金曜午後は「寺子屋」の時間とした。

本年度はIUC創立60周年の節目にあたり、12月6日の夕方から夜まで東京都渋谷区で行われたその記念式典(9-3-1参照)には学生と教職員も参加した。そこで翌日に授業を行えば無理を強いると判断し、7日は特別休校とした。

5-1 午前の授業内容

5-1-1 接続表現

接続詞に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方(複段落の作成)を指導した。教材としてIUC作成『接続表現』を用いた。14日間28コマをこの指導にあてた。

5-1-2 統合日本語Ⅰ

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、IUC作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を用いた。各課は同一の話題で構成される「文章編」と「会話編」からなる。「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。第2学期は上巻第1・第2課、第3課(文章編)を扱い、指導には18日間36コマをあてた。このうち12月20日はミニ発表会を行い、学んだ知識や技能を運用する機会とした。

5-2 午後の内容

5-2-1 総合運用Ⅱ

月・火・木曜の「総合運用Ⅱ」では、現代社会の問題をめぐる生の教材、例えば新聞・雑誌記事や報道番組などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、一般的な話題についても日本語母語話者と話し合える能力の獲得を目指し、意見文なども書かせた。教材は、話題シラバスのモジュール型教材群「外国人と国籍」「文化の発信」「ものづくり」

「教育」「現代の若者たち」「ワーク・ライフ・バランス」「地球環境」「差別と人権」「情報化社会」である。学生の興味や関心あるいは必要性に応じて各クラスが教材を選択し、授業進度も各クラスの理解度に合わせて調整した。ただし、「外国人と国籍」に関しては全クラス必修とした。18日間36コマを指導にあてた。

5-2-2 寺子屋

第1学期に準じる（4-2-2を参照）。第2学期は6日間12コマ分の時間をあてた。

6 第3学期の教育内容

冬休みが明けた1月から第3学期が始まり、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業がコースに加わる。

午前は月・水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木・金曜に「統合日本語Ⅱ」を実施した。午後は月・火・木曜に「総合運用Ⅲ」、水曜に随意科目の「選択C」、金曜に「寺子屋」を実施した。

6-1 午前の授業内容

6-1-1 統合日本語Ⅱ

第3学期に全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」のみである。IUC作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』の、第3課会話編（上巻）、第4・第5課（下巻）を扱った。木・金曜の週2日、計15日間30コマ実施した。最終週の2日間はミニ発表会を行った。

6-1-2 選択A

自分の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組む科目である。学生には第3・第4学期を通じて同じコースを継続履修するよう奨励した。コース選択に迷う学生のため、第2学期中に各コースの説明と質問受付の機会を設けた。本年度は「文化人類学」「政治学」「文学」「歴史学」「法律」「日本学」の6コースを開設した。月・水曜、計16日間32コマ実施した。

・文化人類学

受講生の専門、関心を考慮し、第3学期は「フィールドワーク」「植民地とネイティブ」「伝統文化と記憶」「物語るということ」「グローバル化」というテーマを設定し、具体的な事象から抽象的課題に至る専門性の高い読み物を教材とした。第4学期は各学生が自

己のテーマにそった素材を提供し話し合いを進めた。校外学習として、「ヤマトの中の沖縄を知る」ということで、鶴見を訪問した。

・政治学

大学生向けの教科書を読み、第3学期は日本政治、第4学期は国際政治や日本外交に関する理解を深めた。授業では読み物の内容確認や、学生から出された話題を中心に議論を行った。また、学生が自分で選んだニュースを発表し、議論を進める時間を設けた。第4学期には国会議事堂、領土・主権展示館を見学した。

・文学

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、様々な観点から作品を分析し、話し合いを行った。おおむね2～3回の授業で1作品を読んだ。

・歴史学

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ね、語彙・表現の拡充を図った。第3学期から第4学期前半は学生の興味・関心・必要性に応じて、専門書・論文および歴史的史料を素材とする読解練習を行った。第4学期後半は、各学生が自分の研究テーマに関する資料を選び、2時間の授業を構成する取り組みを行った。また、横浜市中心図書館、国立国会図書館を訪れ、図書館の使い方と資料の探し方を体験した。

・法律

憲法を中心に、民法、国際法、刑法、知財法、会社法の一部を取り上げ、条文・判例を自力で理解できる技能を育成することで、法律に関わる話題について自ら調べ、それを説明し、自説を展開できるよう指導した。また、裁判傍聴、東京地検見学、日本大学法学部大学院授業体験なども行った。

・日本学

専門が定まっていない学生、幅広い分野で活かせる日本語力を伸ばしたい学生などを対象に設けられた選択科目である。「選択A」の専門分野を中心に日本研究や日本についての多種多様な教材を用い、知識を蓄え、理解を深めたのち、互いに話し合うことで日本語力の定着を図った。

6-1-3 選択B

選択Bでは、必要とされるあるいは弱点と思われる日本語力の増強のために、「話す」「聴く」「読む」「仕事の日本語：職場編」の4コースを開講した。火曜の計7日間14コマ

をあてた¹¹⁾。

・話す

第3学期と第4学期に開講された。2学期間連続して受講する学生と、どちらかの学期のみ受講する学生がいた。IUC作成『洗練された会話のための表現集』を共通教材とし、討論におけるフォーマルな表現の習得に努めた。討論、ディベート、音読、即時的なスピーチ、フォーマル・カジュアルなどのスピーチレベルを変えて行う会話練習などの活動、発音・イントネーションの指導などを行った。

・聴く

メモを取りながら解説番組や討論番組を視聴し、その内容を再生する練習を行った。後半はスクリプトのないトークショーにおける発言の意図をつかむ練習を取り入れた。

・読む

中学受験、高校受験、大学受験の問題を中心に、日本の学校教育ではどのような読解力が求められているかを体感し、文章の背景の理解と読解力を上げることを目指した。授業はピア・ラーニングを中心に行った。

・仕事の日本語：職場編

ビジネス場面での待遇表現の位置づけで、さまざまな状況における会話練習を行った。また、ビジネス上のコミュニケーション問題の事例を読み、問題の所在、解決方法について考え、ディスカッションを行った。

6-2 午後の内容

月・火・木曜に開講される「総合運用Ⅲ」は、「現代史」「大衆文化」「ビジネス社会」の3コースの中から1つを選ぶ選択授業である。いずれのコースも記事の読解、ビデオの視聴、そしてその内容についての討論などの活動が盛り込まれている。計20日間40コマ実施した。水曜は「選択C」を、金曜は「寺子屋」を実施した。

6-2-1 総合運用Ⅲ

・現代史

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の近現代史を、「戦前の日本1900-45」「敗戦と復興1945-55」「高度成長1955-70」「現代の日本1970-95」の4期に分け、ビデオと読み物で概観した。また、中学・高校の歴史教科書の記述を比較するグルー

プ・プロジェクトを実施した。

・大衆文化

広い意味での日本の「大衆文化」に関して、専門家によって書かれた論文を読み、議論ができるようになることを目標とした。「広告」「マンガと教育」「ことばと音楽」「映画とオタク」という各テーマで資料を読み、映像を見て話し合ったうえで、学生が発表する時間を設けた。コースの最後には、学びを統合する目的で、学生各自が「文化」と思う事象をとりあげ発表した。

・ビジネス社会

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「創業者と起業家」「アベノミクス」「SDGs」「決算書の読み方」「マーケティング」などの話題を取り上げた。NHKの「おはBiz」から、毎回一人ずつ学生が興味を持った記事を紹介し、話し合いも行った。また、コトバンク株式会社代表取締役、小泉純氏から起業の経験や事業展開などの話を直接きく機会を設けた。

6-2-2 選択C

第3・第4学期には随意科目として「文語文法」「漢文」「ビジネス」の3コースを開設し、水曜に実施した。「ビジネス」は外部から招いた専門家が指導に当たった。

・文語文法

文語文法の用語や歴史的仮名遣いから導入し、動詞・形容詞・助動詞の指導に進み、文語作品の部分的読解も並行して行った。

・漢文

漢文資料を読む基礎訓練として漢文や漢文体の素材を取り上げ、読み下しと解釈の練習を行った。まず漢文の基礎構文をおさえ、それを応用して短い文章を読んだ。

・ビジネス

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯を紹介し、今後の展望と課題について講義した。元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が指導に当たった。

6-2-3 寺子屋

4-2-2ですでに述べた活動に加え、教員とともにテレビドラマを視聴することを通じて聴

き取り能力を鍛える「ドラマ部屋」と、学生有志と一緒に映画を鑑賞する「映画研究会」が発足した。また、次節で述べる「就活指導」もこの時間に実施した。

6-2-4 就活指導

学生の就職活動を支援するため、2月から随意選択科目としてキャリアコンサルタント田中孝一郎氏による「就活指導」クラスを金曜午後に開講し、レギュラーコース終了後の6月28日まで継続した。第3学期中は講義、第4学期からは各学生に個別指導を行い、履歴書・エントリーシート・職務経歴書の書き方の解説や内容の添削・アドバイスをを行った。

7 第4学期の教育内容

プログラム最終第4学期の午前は、第3学期午前と同様の形態をとる。「選択A」は同じコースを第3学期から継続履修するが、「選択B」は「話す」「書く」「就活の日本語」「現代小説」「日本文化論」の5コースから1つを選択できる。「選択A」は月・水曜、「選択B」は火曜に実施した。そして木・金曜には「統合日本語Ⅲ」を開講した。

午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「文法強化クラス」のいずれか1つの形態を選択することができる。「プロジェクトワーク」は学生と担当教員の相談の上で任意の時間に週1コマ（50分）実施した。「グループ学習」には週2コマ（100分）をあてた。今年度は「文法強化クラス」の選択者はいなかった。随意科目である「選択C」は第3学期と同じコースが用意され、水曜午後に開講した。金曜午後には「就活指導」が実施された。

7-1 午前の授業内容

7-1-1 統合日本語Ⅲ

木・金曜に実施した「統合日本語Ⅲ」では、『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』テキストの未終了部分をカバーした後¹²、日本語の主に形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。学生の到達度、興味、要望に応じて各クラスでそれぞれに教材を選択し、内容に関連した発話活動などを通じて既習事項を総ざらいし、日本語の知識をより確実なものにするとともに、日本語上級者が知っておくべき事項の欠落を補うなどした。16日間32コマをあてた。

7-1-2 選択A

第3学期と同じコースを継続履修する。15日間30コマをあてた。各コースの内容については6-1-2を参照されたい。

7-1-3 選択B

第4学期の火曜は、「話す」「書く」「仕事の日本語：就活編」「日本文化論」「現代小説」の計5コースを開講した。第3学期同様日本語力の増強を図ることも可能であるし、また、まとまった内容のものを読むという目的で「日本文化論」「現代小説」を選択することもできる。8日間16コマをあてた。（「話す」コースについては6-1-3参照）

・書く

随筆から小論文まで、幅広い分野の文章表現力の習得を目的とした。学生は毎週400-600字程度の文章を書き、授業ではそれを学生間で検討・批評した。また、文章表現技術修得のための教材を用いて、毎週異なる視点から日本語のよりよい文章について学んだ。

・仕事の日本語：就活編

就職活動を考えている学生を対象とし、面接の練習、メールの課題提出などを通して、日本語力をのばしていくことを目的とした。また、元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が面接官となり、模擬就職面接を行った。（6-2-2「選択Cビジネス」参照）

・日本文化論

青木保著『日本文化論の変容』を中心教材とした上で、本文で言及されている様々な日本人論の著作を講読し話し合いをした。

・現代小説

現代作家による短編あるいは中編小説を読み、論じた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、向田邦子、江戸川乱歩、宮部みゆき、本谷有希子、川上弘美、小川洋子の作品を扱った。1作品につき短編は1回、中編は2回の授業を費やした。

7-2 午後の授業内容

第4学期の午後は「プロジェクトワーク」あるいは「グループ学習」が行われた。また第3学期と同様、随意科目である「選択C」を開講した（詳細は6-2-2を参照）。金曜午後には先学期から引き続いて「就活指導」が開講され、レギュラーコース終了後の6月28日まで継続した。（「就活指導」の詳細は6-2-4を参照）

・プロジェクトワーク

各学生が個人またはグループで自己の専門や興味ある分野の主題を選び、教員から個別の指導・助言を受けながら、調査研究や文献の読解などを行う。今年度は37名の学生が選

択し、うち2名が1つのグループを結成した。テーマに関しては卒業発表会の内容と重なる部分が多いので、そちらを参照されたい(8 卒業発表会)。学生1人につき週1日、計8コマ(1コマ50分)を指導にあてた。

・グループ学習

特定の日本語課題に対して関心を同じくする者が、数名でグループを構成し学習する。今年度は、日本語能力試験の受験準備を行う2つのグループが成立し、一方はN1、他方はN2に備えた。各グループにつき週2日、計16コマ(1コマ50分)を指導にあてた。

8 卒業発表会

卒業発表会は10カ月間にわたる学習の集大成となる催しであり、年度の最終週に举行される。学生は質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、改まった形式の発表をする。会場を2ヶ所に分け、2日間にわたって開催した¹³⁾。

第4学期の午後に「プロジェクトワーク」を選択した学生は、その時間内に卒業発表の準備を進めた。「グループ学習」の学生は第2・第3学期に行われたミニ発表会などの機会に話した内容を洗練させるなどして卒業発表に仕上げた。発表準備にあたっては学生一人ひとりに割り当てられた担当教員が原稿のチェックを行い、発表の予行演習を指導した(学生1人あたり2コマ分をあてた)。

IUCのウェブサイトにある[「卒業発表会内容紹介」ページ](#)では、過去の年度も含め、題目と要旨を公開しているので参照されたい。

9 通年で実施した学習指導と行事など

9-1 評価

9-1-1 テスト

本コースでの学習成果を測定するため、入学直後と卒業時に実力試験を実施した。文法、読解、聴解、漢字の試験、そして面接形式での発話テストを入学時と卒業時に実施し、入学時にのみ作文のテストを加えた。

昨年度と同じく、筆記テストはGoogle FormsとQuilgoを用いて非同期的に実施したが、発話テストは一对一の対面形式に戻して実施した。入学時の作文テストも、全学生を一室に集合させ、辞書の利用を認めて1時間以内にその場で文章を考え、紙に手書きで書いて提出させた。

また、第2学期末には「中間実力試験」を実施し、プログラムを半分終えた時点での読解

力と聴解力を学生自身が確認できるようにした。問題は、日本語能力試験1級と2級の「聴解」「読解・文法」の過去問題から識別力の高いものを採用し、入学時・卒業時の実力試験と同様にプラットフォームとしてGoogle FormsとQuilgoを用いた。

9-1-2 個人面談

IUCでは入学時の実力試験結果をもとに第1学期のクラスを編成するが、コース開始に先立ち、午前（文法の授業）のクラス担任教師が自分の受け持つ学生と個別に面談し、試験の結果を踏まえて40週にわたる学習の指針などを助言した。第1学期末にも担任と学生とが個別に面談し、その間の学習ぶりを振り返り、新たな課題を設定するなどした。

文法のクラス担任と学生の個人面談の機会はその後も各学期末に設け、最終学期にあたる第4学期の学期末には10ヵ月の学習を振り返った。

9-2 漢字学習プログラムSKIP

プログラム期間を通じて、常用漢字習得のための自律学習プログラム「SKIP (Special Kanji Intensive Program)」を実施している。学生は常用漢字すべてを卒業までに習得できるよう毎日教材を独習し、授業以外の時間にクイズ全156回を受けることとなっている。教材にはIUC編集発行の市販教材で、漢字を単独ではなく熟語や例文と共に学習できるよう構成された[Kanji in Context](#)ならびにそのワークブック[Kanji in Context Work Book vol. 1・2 \(ジャパントイムズ社\)](#)と、それらをWebアプリケーション化した「[WebKIC](#)」を用いた。

そして、学習を促すために「KIC統一試験」を作成し、実施した。統一試験では、漢字の書き方、読み方等の問題100問を全学生が受け、点数が午前中の文法クラスで決められた合格点を下回った場合は再試験を受けなければならない。各学期に1～2回、計7回実施した。第1学期から第3学期までは、金曜日の寺子屋の時間に、そして第4学期は「統合日本語Ⅲ」の時間内に行った。

クイズを受ける際、学生は白紙あるいは印刷した問題用紙に答えを記入し、それをスキャンするかあるいはスマートフォン等で撮影するかしてPDFに変換し、提出した。iPad + Appleペンシルなどの手書き入力デバイスを使い、問題用紙のPDFファイルに直接答案を書き込んで提出する学生もいた。統一試験を受ける際は、学生は与えられた紙の解答用紙に手書きで答えを書き込み、それを撮影してPDFに変換し、提出した。PDFでの提出は、リモート勤務での採点作業を可能にするためである。

第1学期2週目に50分間、各文法クラスで担任が漢字についてのオリエンテーションを行った。また、第1学期の昼休みに、IUC教材助手が「ミニ漢字講座」を開講し、漢字の書き方の指導や部首の解説を行った。第1～第3学期は寺子屋の時間を中心に、漢字を書いたり漢字を使って例文を作成したりする「漢字練習会」を開催し、教員がその指導に当たった

(4-2-2「寺子屋」参照)。

9-3 講演会など、各種の企画や催し

9-3-1 IUC創立60周年記念行事

12月6日、東京渋谷のセルリアンタワー東急ホテルにて記念式典「NAVIGATING FORWARD: CHARTING THE COURSE OF US-JAPAN RELATIONS」が挙行された。日米関係・交流に深く携わる諸氏より祝辞を頂戴し、奨学金支援団体の代表者、卒業生、在校生など250名を超える参列者を得た¹⁴。3月29日には横浜国際協力センター6階GALERIO (ガレリオ)にて「60周年記念IUC学生発表会 Myヨコハマ」が開催され、来場した横浜市民の前で6名の有志学生が横浜という都市について様々な話題で発表を行った。

9-3-2 全学生あるいは希望者が対象のもの

全学生を対象とする講演会を1回(4月26日)、希望者を対象とする講演会・交流会・ワークショップを7回(11月11日、11月15日、1月26日、2月3日、2月21日、3月21日、4月24日)開催した。5月13日から24日にかけては、日本大学法学部で開講されている授業を体験受講できる機会も設けられた。また、株式会社東急ホテルズ&リゾートのご厚意により有志学生を各地の日本遺産に泊まりがけでご招待いただき、学生がそこで見聞したこと、考察したことをIUC卒業発表会ならびに「東急ホテルズ&リゾート日本遺産研究発表会」¹⁵で発表するという「日本遺産プロジェクト」も催行された¹⁶。

このほか、希望学生を対象とした課外活動「書道クラブ」「古筆クラブ」「茶道クラブ」を設けた。「書道クラブ」は書家小林紘子氏の指導のもとで書道の稽古を行い、卒業発表会でその成果を披露した。「古筆クラブ」は同じく小林氏が指導を担当し、手書きの古典文献を理解するのに欠かせない「くずし字」の読解練習を段階的に進めた。「茶道クラブ」は裏千家茶名結城宗織氏のもとで茶道の基本を学んだ。

9-3-3 日本財団フェロープログラム関連行事

日本財団のご厚意により実施している日本財団フェロープログラム¹⁷では、レギュラーコースの授業と活動に加えていくつかの催しを行っている。今年度はIUC卒業生による講演会(4月26日)を設け、フェローによる特別発表会を前期(1月22日・1月29日)と後期(5月13日・20日)の2度に分けて開催した。

10 おわりに

今年度のIUCレギュラーコースは5年ぶりの完全対面教育体制で施行され、学生と教職員

の口頭コミュニケーションがようやく年度を通じてオンライン会議ツールを介さずに行えるようになった。とはいえ全てが従来の状態に巻き戻ったわけではなく、5年前よりも呼吸器感染症に対する予防意識が高まり、急ピッチで導入の進んだICTによって学習や業務に対する空間的・時間的制約が多少なりとも緩和された。

ICTの学習への活用については「生成AI等活用についての指針」を学生に示したが(3-3参照)、効果的な利用を「歓迎する」としながら実際に使った場合には「申告せよ」と迫り、一方で剽窃の行為は「厳禁する」という硬軟の混在した語調、そして具体的な活用例を示さない曖昧な文意は学生に戸惑いを与えたように見える。技術の活用に対して学生が不必要に萎縮したり罪悪感を感じてしまったりすることがないように、指針を改善しなければならない。

参加学生全53名のうち49名が回答した年度末アンケートではほとんどの学生が本コースに好評価を与えた¹⁸が、IUCの教育について寄せられた具体的な意見は多様である。絶え間なく押し寄せる課題に圧倒されたと悲鳴を上げる者もいれば、むしろそれだけにやりがいと達成感を得たと言う者もいる。教員の厳格さを熱意ある指導と捉え感謝する者もいれば、学生に内在する学習意欲を損なったとして批判する者もいる。それぞれの学生が率直に書き記した、しかし互いに矛盾するコメントをどう総括して将来の教育に活かしていくべきかは悩ましい。

一方で最近目につくのは、教材に伝統的な性役割意識に基づくものがあるという批判の声である。教材の内容と扱い方を十分に検討し、学習者の価値観と尊厳を損なうことがないように準備する必要があるだろう。

また、もう一つ気がつくのは、学習内容や指導の個別化を望む傾向が高まっていることである。確かに同じ日本語を学ぶといっても学生にはそれぞれの動機があり、目指すゴールもそれぞれに異なる。このような学生を教育する場のあり方として理想的なのは、学生が自分の動機とゴール設定に従い自律的に学んでいくのを教員が支援するという形だろう。今回の年度末アンケートでは「寺子屋」を評価する声が多かった¹⁹。それは学習をより個々の学生の自律性に委ねていくことがIUCに求められている証左だと解釈できるかもしれない。もっとも、キャンパスに収容しきれないほど学生数が増えたレギュラーコースにおいて今以上に教員が学生に対し個別の細やかな対応を施していくとすれば、その労力は人的資源の許す限界を超える。しかし、多彩な学生が一人ひとりの個性と自律性を安心して発揮し、互いにいい刺激を与え合いながら日本語能力の習得に集中できる環境を作っていくことは、IUCが真剣に取り組んでいかねばならない課題である。

今まで様々な形で関わり支えてくださった全ての人々のおかげで、IUCは創立60周年、実に還暦を迎えることができた。長年培ってきた教育の長所を維持しながら、我々はこれから可能性あふれる学生たちとともに豊かな学びを模索していく所存である。

(あきざわ ともたろう/IUCレギュラーコース言語課程主任)

注

- 1 IUCでは、敬語だけでなくその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を総称して待遇表現と呼んでいる。
- 2 <https://zoom.us/>
- 3 「会話パートナー」とは、授業時間外にIUC教材助手と自由な会話ができる機会である。会話能力が弱めの学生のために提供している。
- 4 https://edu.google.com/intl/ALL_jp/workspace-for-education/editions/education-fundamentals/
- 5 <https://quilgo.com/>
- 6 <https://slack.com/>
- 7 [秋澤 \(2023\)](#)の3-2
- 8 <https://www.repeataik-info.net/>
- 9 許明子・宮崎恵子 (2013)『レベルアップ日本語文法中級』くろしお出版
- 10 水曜は待遇表現、それ以外の曜日は文法、というように曜日によって扱う対象を決めたクラスもあれば、文法テキストの進み具合に合わせて適宜待遇表現を扱う日を挟んでいったクラスもある。
- 11 2024年2月6日、積雪により午前中を休校とした。このため、選択Bの授業が1回休みとなった。
- 12 1つのクラスは『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を第3学期までに終了した。
- 13 会場として、横浜国際協力センター6階の会議室と同階のGALERIOを横浜市よりお借りした。
- 14 [記念式典の開催を報告するIUCのFacebookページ](#)
- 15 IUCレギュラーコース終了後の6月12日(水)、セルリアンタワー東急ホテルの能楽堂にて開催された。
- 16 本節には記さなかったが、他にも多くのイベントが催された。それらについては稿末の資料「2023-24年度 通常授業以外の各種イベント」を参照されたい。
- 17 https://iucjapan.org/html/curri_regular_j.html
- 18 4件法で、Excellentが38.8% (19人)、Goodが57.1% (28人)、Fairが0.5% (1人)、Poorが0.5% (1人)
- 19 年度末アンケートの結果や学生が直接筆者に告白したところによると、「寺子屋」の時間は授業の宿題やSKIPの勉強に追われていた、あるいは疲れてただ帰宅してしまった、という声が少なくない。しかしそのような学生でも、友人とともに、または一人で自分なりの勉強ができる時間自体は歓迎したようだ。この時間に行われた教員によ

る個別指導や「漢字練習会」なども好評だった。「寺子屋」はオンライン体制下の2020-21年度にもRemo (<https://remo.co/>) というミーティングサービスを用いて実施したが、その時の学生の評価は低かった。オンラインでは、他の学生と一緒に勉強している感覚を得るのが難しかったようだ。[秋澤 \(2021\)](#) 第10章を参照のこと。

参考文献

- 秋澤委太郎 (2021)「2020-21年度レギュラーコースカリキュラム報告—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第10号 pp.48-68
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Akizawa.pdf>
- 秋澤委太郎 (2023)「2022-23年度レギュラーコースカリキュラム報告—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第12号 pp.28-45
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2023_Akizawa.pdf>
- 大竹弘子 (2024)「2024年度漢文夏期集中コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第13号 pp.64-67
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2024_Otake.pdf>
- 加藤陽子 (2024)「2024年度夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第13号 pp.46-63
 <https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2024_SatoAri.pdf>

【資料】2023-24年度 通常授業以外の各種イベント

2023年

- | | |
|------------|--|
| 10月1日 (日) | 鶴岡八幡宮 流鏝馬拝観 |
| 11月4日 (土) | 横浜市立大学 浜大祭 |
| 11月11日 (土) | 東京都立大学等々力高等学校にて
ロータリークラブ主催「国際交流授業」 |
| 11月15日 (水) | 国文学研究資料館&IUC共催「文献資料ワークショップ」
“Ancient Calligraphy Fragments” kohitsu-gire 古筆切 |
| 12月6日 (水) | IUC創立60周年記念式典記念式典
「NAVIGATING FORWARD: CHARTING THE COURSE OF US-JAPAN RELATIONS」 |
| 12月16日 (土) | 鶴岡八幡宮 御神楽拝観 |

2024年

- 1月22日 (月) 日本財団奨学金受給生前期特別発表会 (1)
- 1月25日 (木) カール・パイザー氏 (1995-96卒業生) による就職相談会
- 1月26日 (金) 「カケハシ・プロジェクト」
日本語弁論大会優秀者・神奈川大学学生との交流会
- 1月26日 (金) ジェイ・アラバスター氏 (2004-05年度卒業生) 引率による和歌山
~28日 (日) 県太地町 (映画 『おクジラさま』 の舞台) ツアー
- 1月29日 (月) 日本財団奨学金受給生前期特別発表会 (2)
- 2月3日 (金) 国文学研究資料館&IUC共催「文献資料ワークショップ」
“Old Japanese Moveable-Type Editions”
古活字版から見る日本の書物史
- 2月21日 (水) 同上
- 2月22日 (木) Connect Jobによるキャリアカウンセリング&求人紹介セミナー
- 2月29日 (木) KPMGジャパン 会社説明会
- 3月21日 (木) 国立歴史民俗博物館見学
- 3月29日 (金) 「60周年記念IUC学生発表会 Myヨコハマ」
春休み期間中 「東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産プロジェクト」
- 4月24日 (水) 米国外交官フィリップ・ロスキャンプ広報・文化交流担当公使等
との座談会
- 4月26日 (金) 第20回IUCレクチャーシリーズ ケイト・ワイルドマン・ナカイ氏
- 5月17日 (金) 下田黒船祭に招待参加
~19日 (日)
- 5月13日 (月) 日本大学法学部大学院体験授業
~24日 (金)
- 5月13日 (月) 日本財団奨学金受給生後期特別発表会 (1)
- 5月20日 (月) 日本財団奨学金受給生後期特別発表会 (2)
- 6月12日 (水) 東急ホテルズ&リゾーツ日本遺産研究発表会